石仏調査ニュース
ちがさきの石仏
第　14　号

発行
茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館
編集協力
文化資料館と活動する会
（民俗行事部会）
連絡先
〒253-0055
茅ヶ崎市中海岸 2-2-18
℡:0467-85-1733
e-mail:shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp

本村八王子神社の彫刻

剣を持つ男の正体

平野　文明

今回はクイズです。

本村三丁目に八王子神社があります。その拝殿の階段状の入口の上、屋根に近いところに写真のような彫刻があります。さて、問題です。これは何を表しているのでしょうか。

印刷された写真ではわかりにくいかも知れないので説明しておきます。彫刻は三段になっています。一番上の段は、飛んでいる鶴に乗るおじいさんの彫刻です（図1）。おじいさんは左手に軍配を、右手に長い竿を持っています。竿は、先端に何か差してありますから、釣り竿ではありません。

おじいさんの下の段は爪をむき出しにする龍です。

その下の段の絵柄は複雑です（図2）。真ん中に男の人。足をふんばって、左手で腰に下げた剣の鞘（さや）の鯉口を持っています。右手には抜いた剣を持ちます。

剣の先には龍がいて、男の人に向っています。

画面の、向って右側、男の人の左足の脇には女の人が「あれー　たすけてー」と両手をあげています。

ここでわかった人は、日本の神話にたいへん詳しい人です。

わからない人にヒント①。この神社の名前は「八王子神社」です。本殿にお祭りしてあるのは（一）市杵島比売命（いちきしまひめのみこと）（二）多紀理比売命（たきりひめのみこと）

図　1

図　2

（三）多岐津比売命（たぎつひめのみこと）（四）天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）（五）天之菩卑能命（あめのほひのみこと）（六）天津日子根命（あまつひこねのみこと）（七）熊野久須毘命（くまのくすびのみこと）（八）活津日子根命（いくつひこねのみこと）の八柱の神さまです。神さま達の名は、神奈川の神社庁のホームページからとりました。

わかった人は、この八柱の神のうちの男神の父神とその物語を知っていたからです。知らない人は続きを読んで下さい。

初めから三番までは女神、そのあとの五柱は男神で、すべてきょうだいです。どうやってお生まれになったかというと、スサノオノミコトは、亡くなった母イザナミノミコトを慕って根の堅州国（ねのかたすくに）に行くことになったのですが、出発の前に、姉さんのアマテラスオオミカミに会っておこうと天上にむかいます。その様子がものすごい勢いだったので、アマテラスは弟が攻めてきたと勘違いして「来ちゃだめ！」。弟「攻めに来たんじゃない！」。姉「どうやってそれを証明するの？」。弟「ここでお互いに子ども神を出現させてみて、オレの子が女神だったらオレの言うことはウソ、男神だったら本心ということに賭けてみないか」の会話があって、アマテラスからは三女神が、スサノオからは五柱の神が生じましたが、予言どおりみんな男神だったのです。

まだわからない人にヒント②は、彫刻の絵柄は蛇退治の様子ですよということ。

「男の人はスサノオノミコトだ！」と言った人は、神話の続きを知っている人ですね。知らない人は次を読んで下さい。

姉さんとの間にはそのほかにもいろいろあったのですが、別れてからスサノオはイヅモの国に来て、山奥で、若いものすごい美人とその年老いた両親が泣いているところに行き会います。老人の名はアシナヅチ、老婆はテナヅチ、ものすごい美人はクシナダヒメといい、間もなくヤマタノオロチがヒメを飲みに来るので泣いているのですと聞きます。ものすごい美人を見ては放ってはおけないので、自分と結婚するならオロチを退治してあげようといって、大酒を食らって寝てしまったオロチをズタズタに切ってやっつけました。もちろん、ものすごい美人は奥さんにして。めでたし、めでたし。

これで彫刻の絵柄が何を表わしているか大方わかりました。龍はヤマタノオロチ、オロチを切った剣はトツカノツルギ、それを持つ男の人はスサノオノミコト、倒れて「アレー！」と叫んでいるのはクシナダヒメです。中段の龍もヤマタノオロチです。頭が八つあるので、あちこちから顔を出しているのです。

しかし、わからないのが一つあって、一番上の段にある鶴に乗って空を飛ぶおじいさんの正体がわかりません。

スサノオはクシナダヒメとの新居を求めて方々しますが須賀（すが）という所に来て、「じつにすがすがしい所だ。気に入った」と、お宮を造ります。アシナヅチもつれてきて、この宮の責任者に任命し、稲田宮須賀之八耳神（いなだのみやすがのやつみみのかみ）とい

う名を与えます。

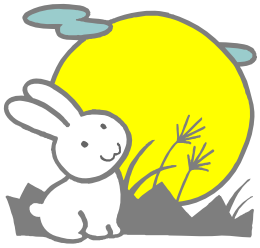
鶴に乗るおじいさんはこのアシナヅチかとも思うのですが、神話では鶴に乗っておりません。

クイズは以上でおしまいです。

江戸時代までは、本村のこの神社は「八王子権現」と呼ばれていました。そのころの祭神は、先に紹介した八柱の神々ではなかったと思われます。なぜなら、明治の初年に、政府は神仏分離を命じて、全国の神社に対して、神社の中にある仏教色をすべて取りのぞくようにと命令を出しました。「権現」という名前を付けている神社は仏教的だから、祭神も神社の名称も変えろというのです。そこで祭神は、古事記・日本書紀の神話に出てくるスサノオとアマテラスの誓約（うけい）で生まれた八柱の神があるので、ちょうど良いということからそのように変え、名称も、八柱の神にゆかりの「八王子」を活かし、「権現」を「神社」に変えて「八王子神社」としたものの考えられます。だから、向拝にあるスサノオのオロチ退治の彫刻は明治以降の制作といえます。

それでは江戸時代は何を祭神としていたかについてですが、一般には「八王子権現」は牛頭天王とその八人の子供を祀るという解説がなされています。ここで取り上げている本村の八王子権現では、それが実際にどのような様子だったかを知りたいと思っているのです。

平成二十二年八月十一日



茅ケ崎地区石仏再調査第一回（海前寺・八王子神社・観音堂・厄一王子社・路傍）

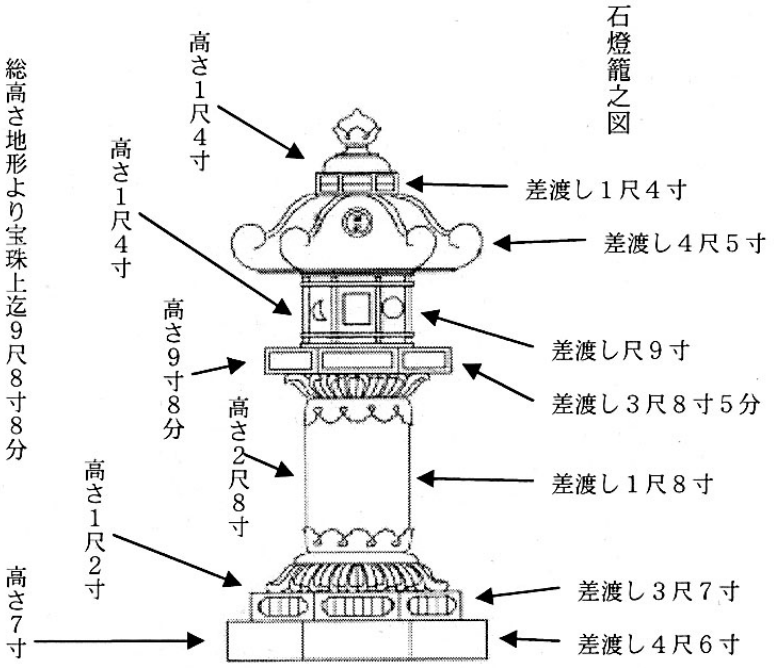
金子　栄司

海前寺山門前に大きな石塔籠がある。上竿に台徳院殿の銘があるので、二代将軍徳川秀忠の霊に奉納した燈籠であることがわかる。「増上寺の石燈籠『増上寺石塔籠現況調査報告書』第三、一版補追を更新…報告者伊藤友巳」の中にこの燈籠について記述がある。関係部分を書いておく。

「惣門左右に写り込んでいる一際大きな石塔籠について記しておきたい。門の左右の一番奥手が筑前久留米藩主有馬中務少輔忠頼（一六〇三～一六五五）の奉納した燈籠である。そのうち一基が茅ケ崎市の海前寺に現存する。残念ながら他の一基の所在は判っていない」

上記の報告書には総門脇に建っていた時の写真があり、勅額門に続く参道の最も目立つ場所に建っていたものであったことがわかる。報告書にはまた、霊廟に献上される石燈籠の寸法指図書とも考えられる『常慶（憲）院霊廟灯（ママ）籠絵図』がある。指図書とは確定されていないが、献上燈籠の高さを揃えるために示したもので、「地盤石（基礎）高さ地より七寸」と細かく指定している。海前寺の他の三基、市役所にも寛永寺燈籠ではあるが四基あり、どれも形や大きさが似通っている。増上寺・寛永寺の霊廟に献上された石燈籠がいずれも同形である根拠になるのではないか。参考に図を載せておく。

燈籠の大きさは現在でも尺（丈）で表されることがある。香川浄心寺を調査した時、本堂前に新しく建てられた燈籠を計測していた時、寄進した方が居合わせ「この燈籠は六尺だよ」と教えてくれたことがある。



常慶（憲）院霊廟燈籠絵図よりの複製図

市内の寺社でも多く見掛けるいわゆる「春日形燈籠」では上から宝珠・笠・火袋・竿・基礎それぞれに約束された寸法割合があるのでどれも同じような姿形となる。一つの説を紹介してみよう。

「出雲石工のホームページ」の記述。石燈籠各部位の寸法割合を「寸割」といい、寸法を割り出すことを「寸掛け」という。

「寸割」の基礎は笠の土付きが基になる。と書いてあるが「笠の土付き」がどの部分をいうのかわからない。従ってこれ以上の説明は意味がないのだが、土付きの五・五倍が火袋の直径（差渡し）。五倍が火袋の高さという。他の資料では火袋の直径の五倍が総高さともいう。茅ケ崎市の石仏調査で計測した石燈籠に当てはめて検証したが、納得できる結果は出なかった。上記寸法指図書の「寸割」と照らし合せて考察してみるとまた参考になるだろう。火袋差渡しは尺九寸、半分は九寸五分なので総高九尺五寸となる。指図では九尺八寸八分であるから三寸八分の誤差である。約三メートルの総高に対して一二センチ、四％の誤差。

海前寺境内の山門東側に寛政十一（一七九二）年三月二十三日銘の宝篋印塔がある。塔身に彫ってある梵字はシッチリアという宝篋印陀羅尼経の象徴文字である。金剛界四仏種子を刻んだ塔が圧倒的に多いが、塔四仏像を刻んだものもある。シッチリア種子を持つ文政四年（一八二一）銘の塔があったが、パソコンでは江戸時代以前の古塔にはないようだ。珍しいので報告しておく。

以上のように、二〇一〇年五月二十一日（金）茅ケ崎地区石仏再調査第一回目は、十時、海前寺に集合した九名で行ない、新たに馬頭観音を発見、地蔵尊一体も追加採録。順調に調査が進み午前中で完了する。

好天気なので予定していなかった八王子神社と厄一王子社・路傍の調査を行うことになり、調査資料を資料館に取りに行ってもらう。八王子神社では社務所の屋根を葺替え中。赤銅が輝いている。Kさんと二人別行動で路傍と観音堂・厄一王子社の調査を行う。道がわからなくなり大分時間をロス。厄一王子社では近所の方から厄一王子社と新編相模国風土記稿・茅ケ崎村の乳母神との関係や祭神、すぐ脇の道が「うしのごぜん」から小出に通じていたこと、境内に祭ってある稲荷社のことなどを伺う。厄一王子社の祭神は『生活の凝視と学校経営』（抄）

第三項　郷土の神社」の中で「厄一王子社（祭神風疾神）」となっている。

茅ヶ崎地区石仏再調査第二回（三島神社・市役所・左近稲荷社・厳島神社・第六天神社）

金子　栄司

七月十六日（金）北茅ヶ崎駅隣三島神社　十時集合　参加四名　快晴。暑くなる予報。文化資料館担当（職員）から熱中症に備えるよう注意がでる。この神社は格別再調査を必要としない。可能な限り対象石仏の写真を正面から撮れるよう工夫して撮り直し、平成二十一年度に取決めた「採寸・スケッチ凡例」と照合し採寸を確認する。

三島神社は駅舎と工場の塀に挟まれていて辺りに人家はない。相模線は大正八年（一九一九）起工式。大正十年（一九二一）に茅ケ崎・寒川駅間五・一ｋｍの試運転が行われ、北茅ヶ崎駅（旧日東駅）の開業は昭和十五年（一九四〇）。現在の社地はそれらの影響を受けたのであろう。狛犬の寄進者銘には「昭和三年　相州茅ケ崎町茅ヶ崎」とあり地元人の信仰の様子が伺える。地元では「権現さん」と呼んでいたと聞く。神仏分離令で権現や牛頭天王など、その他仏教系神号の神社は名を改める様求められた。この頃権現を改め三島神社を名乗ったのであろう。

市役所の国道寄りに寛永寺燈籠がある。三基だったが浜竹・大八木邸から最後の一基が移され四基となった。大型燈籠で総高二・八ｍ。高さを再確認し竿径を再測定する。竿にコンベックスルールを当て目測。見当のつけ方で数ｃｍは異なる。手間は増えるが紐などで柱周りを測り「円周・直径換算表」で直径を求める方法を勧めたい。

新栄町・左近稲荷社。寄進者銘のある手洗石があるとの情報をもらい調査。社殿右手前にあり台形型。昔風に表わすと、横二尺に奥行一尺高さ一尺一寸。手洗石の上に立て掛けた石板に八名の名が刻んであるが以前の講中の氏名である。現在の講中は一〇軒で正面の玉垣に氏名が刻んである。手洗石は白く緻密で上質な大理石で正面に格狭間様に薄く彫り中央に宝珠を浮彫りして、左側面に寄進者の銘がある。社の常のお守りは漬物屋の土士田さんがやっている。参詣人ではない怪しい人影が、と奥さんが様子を見に来た。無断で立入った非礼を詫び、寄進者銘を尋ねる。社が元あった場所の地主さんではないかと聞いて来てくれた。茅ヶ崎駅の開業は明治三十一年（一八九八）、手洗石の銘は明治三年（一八七〇）二月で　□下仲村字下原　飯田□五郎（□は留か富か）。神社の傍に飯田印刷があったと言う。村名字名との関連は分からない。

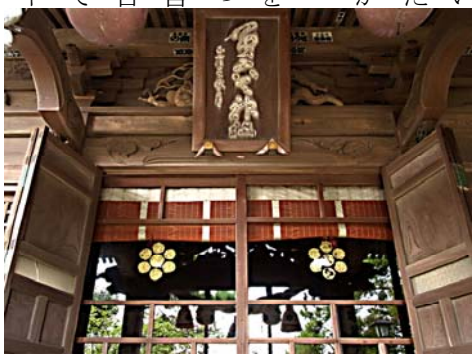
厳島神社。女性会員二名が先着調査中、六名となる。旧鳥居の屋根・笠木・島木がモニュメントとして駐車場に残されている。柱も輪切り状の腰掛石になっていた。採寸の確認がメイン。境内に駐輪していたので駐車場に移すよう注意される。萩園の寺院でも邪魔にならない所に一列に整列させて止めるよう注意を受けたことがある。良いマナーを心掛けて行動しなければと戒める。

第六天神社。炎天で猛暑、所用もあって参加は三名。Sさん心尽くしのチョコモナカで涼をとり、お断りして昼食。八坂社屋根裏にニホンミツバチが巣造りしていて社の周りを盛んに飛び回っている。社殿の中から蚊取線香の煙で追出そうとしていたが巣箱を持参した業者が始末した。谷戸の辺りで出会うことはあるが街中では初めてだ。

本殿前の石燈籠、神前とか宮前という型。左右同形だが別々に造られたもの。向って右燈籠には庚申講中の銘がある。火袋と竿の向きがバラバラ。本殿東側に一〇体余石仏がある。舟形光背型で光背の周辺を残して中ぐりし地蔵像を浮彫りした石仏は、松が丘交差点付近の宅地造成で廃棄されそうになっていたのを引取ったもの。そのような石仏が並ぶ。その右、方形、頂部に向かってすぼみ、中央に角ほぞ穴がある。その上に燈籠の火袋のような角型の石が載っている。明り取り穴が中心に一つとそれを取り巻いて六つ。何かを連想しないかと問われる。第六天神社の神紋・七曜紋ではないかと社殿の紋を示す。月輪に三つ穴はよく見掛けるが七つ穴は神紋を意匠にしたのかもしれない。謂れや経緯は分からない。

社殿の裏に目通り九五ｃｍ（直径）ほどの黒松がある。注連縄が締めてあり御神木である。根元近くの洞が災いして樹勢が衰えてきたとのこと。業者が二人来て養生していた。これだけの老松は少ない。目立つ場所にあれば、長寿や健康祈願にお参りする人も出てこようというもの。神社の名物になる。見上げた辺りで幹が折れていてその先は赤松だった。という口碑があったらしい。

仕舞いの挨拶をした時、年季の入った写真愛好家の宮司さんが撮った自慢の一枚を見せて頂く。ツインウェーブを右端に市域の北西方向を俯瞰していて中央やや右に第六天神社が写っている。ここ以外樹林が見当たらないと言う。この方向には鶴嶺八幡宮と萩園三嶋神社の森が小さく見えるだけである。ミドリの少なさを指摘されていた。



市内の石造物（石仏）から（四）

茅ヶ崎から越後へ

加藤　幸一

「ちがさきの石仏」第一一号（二〇〇九年三月号）に続き、市内の珍しい石造物（石仏）を紹介します。

市内、浜之郷にある懐島山龍前院という曹洞宗の寺があります。市内外の寺院の中で、なぜかこの寺の境内に入ると「ほっと」します。幼稚園の園児の元気な声を聞くこともその理由の一つになっています。

この寺の境内には、市指定重要文化財、明暦三年（一六五八）銘の庚申塔をはじめ十数基の石造物（石仏）があり、その中の一つに親子と思われる名が銘刻されている珍らしい石仏があります。

この石仏に出会ったのが今から十二年前の平成十年十一月二十日（金）会の石仏調査の日です。その石仏の正面には、

「越後国　頭城郡　米山腰猿下村

藤助　娘　施主瑞雲尼首座（しゅそ）」

側面には、

「慶応元丑（一八六五）九月吉日」

とあり高さ約五十糎、石仏としては小型の方と思われます。文字の上の部分には大日如来と思われる坐像が蓮台と共に浮彫りにつくられており、その仏像は智拳印の印相をしているようにみえます。

子どもの頃、忍術使いといって、このまねをして木立の影にかくれたり、高い所から飛び降りたりしたことを思い出し親しみを感じました。

なぜ越後の国か、また藤助　娘か、また瑞雲尼首座　なんだろう三人の人達は。

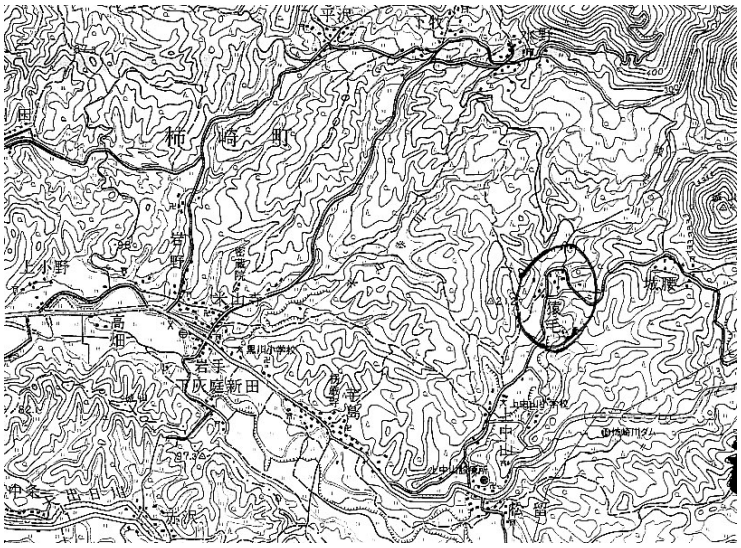
その後、当時の住職に石仏のこと、曹洞宗における首座の地位のこと、首座になるための百日修業のことなど教えをうけました。

越後の国、猿下村への思いが強く、丁度、翌年十一年八月、新潟県上越市直江津に用事があり、現地猿下村に赴くことができました。

信越本線、柿崎駅より約十二粁東へ、旧村猿下村は現在の「新潟県中頸郡、柿崎町大字猿毛」に当ると推定、このことについては柿崎町町史編さん室の人には大変お世話になりました。

大字猿毛なる地に着くと、豪雪に耐える家屋が眼につき雪深い土地がらを想像することができ、土地の人の話によると、江戸時代から多くの人々が関東へ杜氏（酒づくりの職人またはその長）出稼ぎ、現在でも群馬県や埼玉県へ杜氏として働きにでているとのことです。

昭和のはじめ戸数は四三戸、同三十年頃まで炭焼きが盛んで人口も二七〇人、同四十年半ばより過疎化が進み、同五十年頃の戸数は三四戸、人口一三八人、現在は戸数二四戸になったという。



柿崎町大字猿毛　周辺地図

江戸時代「藤助　娘」は、杜氏に関係ある人達と一緒に関東の地に出向いたのではないかなどの考えも浮んで来ました。

その後、柿崎町教育委員会生涯学習係の人から手紙を戴き、それによると、

旧来、猿毛には尼寺が二ヶ所あり、うち一ヶ所は昭和四十年代までは存続しており、現在もその位置が確認でき、敷地内にいくつかの石仏、石碑があったようだ（以下略）。

柿崎町大字猿毛の農家

推測として「越後　猿下村」出身の「藤助娘」なる女性が茅ヶ崎の地に赴きその地で「瑞雲尼」なる人物に碑の建立の手助けをうけたのでは？

いずれにせよ猿毛に残る廃尼寺の調査が必要、だが現在当地は積雪が一米二〇糎ほどあり雪解けをまって確認したいとの内容でした。

月並みのことですが、その地の自然や人情にふれ、土地の人の話しを聞き、初めて、その「藤助　娘」の有様がわかるような気がしました。

茅ヶ崎（浜之郷）の「藤助　娘」が、米山腰、猿下村に嫁いでこの地（茅ヶ崎）にもどり修業して首座になった。藤助の娘が瑞雲尼首座であり、娘が父親藤助のために供養碑を建立したのではないかと思うようになりました。

「山家鳥虫歌」の中には「親は子というて尋ねもするが、親を尋ねる子は稀な」と、但馬地方を中心に歌われた歌があります。

世に云う「親の心、子しらず」とはちがった藤助娘の厚い慈悲深さを思い感じとることができました。

尚、龍前院参道に六地蔵の一基の台座に、世話人瑞雲尼首座の名があります。別の地蔵尊台座には、天保十二年（一八四一）とあり、前記「藤助　娘」の碑には、慶応元年（一八六五）とあり、この間、二十四年間この地に尼僧として住まい、仏の道を説いていたのではないでしょうか。この六地蔵尊の台座には、女性の名が多くみられます。水子供養に関係する六地蔵ではないかと思われます。

龍前院参道の六地蔵

本村・海前寺の祀神不明石仏について

文化資料館　須藤　格

平成二十二（二〇一〇）年五月二十一日、石仏調査で本村・海前寺を訪ねた。調査を進める中で、興味深い石仏に出会った。

写真のとおり、二基、墓地近くの境内の草むらに並んで置かれている。向って左の像は、左手に宝珠、右手に錫杖（しゃくじょう）を持つ地蔵菩薩の坐像である。造立は「天和三(一六八三)年二月三日」と印刻されている。その右は左手に蓮華、右手に数珠を持つ坐像である。造立は「天和三(一六八三)年二月十四日」と印刻されている。彫法はともに丸彫である。

左の地蔵菩薩の蓮座には「詠玉　禅童女」と印刻され、右側の坐像は「□□　禅　童子」（□は欠損）と印刻されている。この二基の石仏は独尊なのか、祀神は何か、関係性のあるものかについて考えてみた。

左の像は、その像容と「童女」と印刻されていることから、子供の守護もしくは供養を祈願した地蔵菩薩と判断できる。右のものに関しては、像容からは祀神が分からない。しかし「童子」と印刻されていること、造立が左の像と十一日違いであること、左の「童女」と印刻されている地蔵菩薩と像容が酷似していて、二基が並べられていること、そして丸坊主であることから、子供の守護、供養のために造立された地蔵菩薩であると推定することができる。

しかしながら、地蔵菩薩のシンボルである宝珠と錫杖を持たず、蓮華と数珠を手にしていることから、他の菩薩の可能性もある。蓮華は「慈悲」の象徴であり、数珠は「煩悩の消滅」の象徴である。この持物の特徴は、准提観音（じゅんていかんのん）の複数ある臂の二臂と同じである。地蔵菩薩をベースに、他の観音の像容を取り込んだものと考えることもできる。また、六地蔵の像容の一つと仮定するならば、六基ある像のうちの二つと考えることもできるが、印刻されている「童子」「童女」という銘から、子供の守護、供養のための地蔵菩薩の一様と捉えるのが自然であると考える。

地蔵信仰は、近世、多様な民間信仰と習合する中、塞の神とも習合した。やがて賽の河原の

信仰へと発展し、地蔵は子供の守護菩薩とされるようになった。地蔵をめぐる民間信仰は極めて複雑であるが、そこから地域でも古くから根付いている信仰を探る糸口ともなる、民間信仰への仏教的な粉飾の素地をなしているものでもある。この二基が造立された時期は、茅ヶ崎の地蔵菩薩の中でも初期の部類に入る。六地蔵の一部であるならば、最も古いものになる。いずれにせよ、近世茅ヶ崎における子供の守護、供養の心象、地蔵信仰が表された貴重な石造物である。

〈編集後記〉

記録的猛暑の到来で、今年は特に夏らしい「夏」を満喫できました。悪くいえば過ごしにくい夏であったとも受け取れますが、どれも自然界のことですから人間の思い通りにはなりませんね。自然界と共存して初めて人間は生きられるのだということを改めて感じました。

野に佇んでいる石仏もまた、元は自然界にあった何も手を加えられていない石ころです。ある人々がそれらに細工を加え、市場に流通させます。するとただの石ころであったものが人々の祈りの対象となったり、何らかの力が得られるとされるご神体になったりします。人間は自然界にある石ころに文化的な価値を与えると同時に、自然界から得た恩恵を自らへも還元してゆくのでしょう。これもまた自然界と共存する人間の営みの一端かと思われます。

「ちがさきの石仏」第一四号では四名の方にご投稿いただきました。民俗全般に広く研究テーマを設定しておられる方、毎月行っている石仏調査をもとにご報告下さった方、独自の調査で深く石仏を研究されている方など、それぞれ違った視点からおまとめいただきました。

市民ボランティアの皆様と地道な努力で進めてきた茅ヶ崎の石仏調査はそろそろ集成する段階へきています。継続は力なり、まさにそのたまものでしょう。調査の成果が結果的に自分たちへ還元できるものになればよいと願っています。

（沼崎）

石仏調査の様子

〈お知らせ〉

茅ヶ崎市文化資料館では、市教育委員会で収蔵している民俗資料を市民ボランティアと共に調査・整理・保存・展示しています。石仏調査もその一環です。平成二十二年度は茅ヶ崎地区を調査します。

資料の整理は毎週木曜日、また石仏調査は毎月第三金曜日です。興味のある方は、ぜひご参加ください。本誌「ちがさきの石仏」への投稿もお待ちしております。

※ご不明な点等がございましたら、一頁記載の連絡先へご連絡ください。なお、本誌はバックナンバーを含めすべて茅ヶ崎市文化資料館のホームページで公開しております。そちらもぜひご利用ください。